

道連れ之夜、情けの朝

——とある辺境の町、とある日暮れどき。

一、仕事の夜明かり

その仕事は、街道に出没する盗賊団の掃討だった。近隣の村々が金を出し合い、傭兵を雇うというのである。楠舞神夜はたまたまその村に逗留していた。路銀が心許なかったこともあり、楠舞一刀流の使い手として名乗りを上げたのが三日ほど前のこと。そしてもう一人、同時期にこの仕事を請け負ったのが、その男——腕利きの傭兵だった。

初めて顔を合わせたときから、神夜は男の視線を感じていた。尖った視線ではない。重く、熱く、それでいて妙に落ち着いた眼差しだった。それは彼女の顔よりも、まず胸元に注がれる。衣装の合間からはみ出した幅広の乳輪と、布地をコリコリ押し上げる逞しい乳首——それらを、男は値踏みするように、しかし嫌味なく見つめた。

「楠舞神夜と申します。よろしくお願ひいたしますね」

神夜は丁寧に頭を下げた。深く腰を折ると、128cmの爆乳が重力に従ってむっちり揺れ、乳輪の露出がさらに広がる。男の視線がそのはみ出た乳輪に吸い寄せられるのを、彼女は密かに感じ取って微笑んだ。

——ああ、まただ。また誰かがわたしの身体を見てくれる。嬉しいこと極まりないです……。

男の名は、とりあえず仮に「キョウ」としておく。剣の腕は確かで、盗賊団のアジトへの道すがら、神夜の戦いぶりに素直な感嘆を洩らした。神夜もまた、彼の無駄のない太刀筋に「まあ……素敵な手際です」と声をかけた。互いに剣士としての敬意が生まれつつあったのは確かである。

仕事はその日のうちに片がついた。盗賊団は十数名。神夜の護式・斬冠刀が薙ぎ払い、月鱗が追撃し、花札霊術が退路を封じる。男の剣も冴えわたった。二人が背中を預け合う瞬間も一度や二度ではなかった。

「お見事でしたね」

「……そっちこそ」

戦い終えた夕闇のなか、二人は互いの健闘を称え合い、村へと戻った。報酬はなかなかの額だった。村人たちは感謝の宴を開こうとしたが、神夜も男も「明日も早いので」と断り、同じ宿をとることになった。もっとも、その宿の部屋は二つしか空いておらず、しかも片方は物置同然の狭さだった。

「ではわたたくしが狭い方で」

「……いや、さすがにそれは」

押し問答の末、広い方の部屋に二人で泊まることで決着した。神夜が「どうぞお気遣いなく」と微笑んだとき、男

の喉が小さく鳴ったのを、彼女は聞き逃さなかった。

——あ……飲み込まれましたね、今、唾。ふふ、期待してくださってるのでしょうか。嬉しい……とても嬉しいです……。

二、夜の帳が下りて

部屋は六畳ほどの和室だった。床の間があり、行灯が一つ、橙色の淡い光を落としている。窓の外では虫の音がしきりだった。

神夜はまず斬冠刀を丁寧に床の間に立てかけ、それから衣装の埃を払った。戦闘でいくらか乱れた着付けを直す。胸元を覆う布はしかし、元々が露出の多い構造ゆえ、どう直しても乳輪の下端は隠れない。いや、神夜には最初から「隠す」という発想がなかった。

「ふう……やはり戦闘の後は汗をかきますね。少し身体を拭きたいのですが……あの、お湯をいただいてもよろしいでしょうか」

「ああ」

男が短く応じる。神夜は宿の者に声をかけ、手桶に湯と手拭いを受け取って戻った。そして部屋の隅に背を向け——といっても角度的に身体の線は完全に隠れない——衣装の帯を解き始めた。

するり、と絹の衣擦れの音。

はだけた着物の合わせから、128cmの爆乳がこぼれ出る。行灯の光に照らされたそれは、白く、滑らかで、しかし質量感に満ちていた。神夜は手拭いを湯に浸し、絞ってから、まず首筋を拭いた。水滴が鎖骨を伝い、谷間へと吸い込まれていく。彼女はちらりと背後を振り返った。

「……あの、見ていらっしゃいますか？」

「……………」

男は黙っていた。しかし視線は神夜の背中——いや、横からこぼれる乳房のカーブに縫い付けられている。神夜は口元をほころばせ、わざとらしく身体を捻った。すると爆乳がタプンと揺れ、乳輪が完全にあらわになる。幅広でぷっくりと盛り上がった桜色の乳輪。その中央で、親指の先ほどに肥大した乳首が、まだ触れられてもいないのに硬く尖り始めていた。

「あら……乳首が立ってしまいました……。お見苦しいものをお見せして、申し訳ないこと極まりないです……。でも、見られるとなんだか嬉しくて……♥」

手拭いが乳房の膨らみを這う。白い布が乳首を掠めるたび、神夜の身体がピクリと震える。自分で拭いているうちに、彼女の息は次第に熱を帯びていった。

「……手伝おうか？」

不意に、男の声が背中に投げられた。低く、軽くはないが、重すぎもしない。むしろその淡々とした響きが、かえって神夜の胎の奥をキュンとさせた。

「え……あ、で、では……お願いしても……？」

振り返りざまの彼女の頬は、ほんのりと紅潮していた。瞳は潤み、唇は半開きで吐息を漏らしている。衣装は完全に腰まで落ち、上半身は裸。128cmの爆乳が重力に逆らうように持ち上がり、行灯の灯りを浴びて艶めいていた。

男は無言で立ち上がり、神夜の背後に回った。手桶から手拭いを取る。湯のしたたる布が、まず彼女のうなじに触れた。

「んっ……♥」

冷たくはない、ほどよい温かさ。しかしそれ以上に、男の指が自分の肌に触れているという事実が、神夜の背筋を甘く痺れさせた。手拭いはうなじから肩へ、肩甲骨のあいだを伝って腰へ。それから横腹をなぞり、ついに乳房の横にまで這い上がってくる。

「あっ……♥ あの、そこは……♥」

「拭かないのか」

「は、はい……拭いてくださいませ……♥ でも、その、わたしの胸、大きすぎて……お手間をとらせてしまい……ひゃうっ♥」

手拭い越しに、男の大きな手が爆乳を包み込んだ。指がやわやわと動くたび、128cmの双丘がぐにやりと形を変える。手拭いの布地が乳首を擦り上げるたび、神夜は喉をのけぞらせて甘い悲鳴をあげた。

「んあ……♥ そんなに念入りに拭かれると、その……お乳が、なんだか張ってきてしまって……♥」

「張ってるのか」

「はいい……♥ 乳首まで、こんなに硬く尖っちゃって……ああ、恥ずかしい……お見苦しいこと極まりないです……♥」

神夜の言葉とは裏腹に、彼女の腰はゆっくりとくねり始めていた。男は手拭いを床に落とし、素手で直接、その爆乳を掴んだ。五指が白い肉にめり込む。親指が幅広の乳輪をなぞり、人差し指が乳首を摘まんた。

「ひゃあああっっ♥♥♥」

コリコリと指先で転がされるたび、乳首がさらに肥大し、桜色から熟れた苺のような赤みを帯びていく。神夜はガクガクと膝を震わせ、男の胸に背中を預けた。

「あ、あの……お兄様……♥」

「……兄様？」

「申し訳ありません、つい……♥でもあなた様の手、とても遅しくて……もっと、もっと触っていただきたいくて……♥」

男は無言のまま、もう一方の乳房も同時に揉みしだいた。両手で爆乳を寄せ上げ、乳首同士をこすり合わせ、掌全体で捏ね回す。そのたびに神夜の口からは「んほおっ♥」「おおっ♥」と獣じみた声が漏れた。

「あああ……♥お乳だけでこんなになっちゃうなんて……ダメなお姫様です……わたし……♥」

神夜は自らの淫蕩を恥じつつ、しかし男の手を拒むどころか、さらに押し付けるように胸を差し出した。

「お兄様……よろしければ、お口でも……♥その、乳首、舐めていただけませんか……？わがまま言って申し訳ないです、でも、どうしても……♥」

三、はだけていく夜

男は答えの代わりに、神夜の身体をくるりと反転させ、そのまま床に押し倒した。背中に畳の感触。見上げる先には、男の精悍な顔と、その向こうの天井。行灯の光が二人の影を壁に大きく揺らしていた。

男は無言で神夜の胸に顔を埋めた。まずは左の乳輪を舌先でゆっくりとなぞる。幅広の乳輪を一周、二周。それから乳首を唇で挟み――。

「んはああああっっ♥♥♥♥」

チュウウウ……と吸い上げられた瞬間、神夜は背中を大きくしならせた。男は容赦なく乳首を吸い、舌で弾き、歯をそっと立てる。そのたびに神夜の秘所からはトロリと蜜が溢れ、太腿を伝って畳を濡らした。

「すごい……♥お乳、吸われるだけで、おまんこがグチヨグチヨになっちゃう……♥ああ……声、抑えなきゃ……宿のみなさんに聞こえちゃう……♥」

「聞こえてもいいだろ」

「そんな……♥聞こえたら、わたしが淫乱な姫だってバレちゃいますう……♥んひいっ♥右もっ、右の乳首もお……♥」

男は左の乳首を吸いながら、右手で右の乳首を摘まみ、左手で左の乳房全体を揉みしだく。ついさっきまで戦場で刀を振っていた手が、今は神夜の爆乳を執拗に責め立てている。そのギャップが彼女の興奮をさらに加速させた。

しばらくして男が顔を上げると、神夜の両方の乳首は唾液にまみれてテラテラと輝き、乳輪全体が充血して赤黒く色づいていた。彼女は荒い息を整えながら、潤んだ瞳で男を見上げる。

「はあ……はあ……♥お兄様、すごいです……わたし、もう……♥でも、まだです……まだ、もっとしてほしい……♥その……下も……」

神夜は自分から帯を解き、衣装を完全に脱ぎ去った。行灯の灯りのもとに晒された裸身は、爆乳、くびれた腰、豊かな尻、そして——完全に無毛の秘所。

「あ……♥見られてる……裸、全部見られてる……♥」

神夜は両脚を恥ずかしそうに閉じようとしたが、男の手がそれを押しとどめた。太腿を開かれる。パイパンの大陰唇がぷっくりと白く盛り上がり、その割れ目からは透明な蜜が溢れて、会陰をつたい、窄まりを濡らしていた。

「ああ……♥おまんこ、見ないで……♥こんなに濡らして、はしたないこと極まりないです……♥でも、お兄様に見られて、嬉しくてもっと濡れちゃう……♥どうしてでしょうか……わたし、こんなに淫乱で……♥」

男が指を伸ばし、濡れた割れ目をそっと左右に開く。クチュ……という小さな水音とともに、肉ピラが露わになった。内側は熟れた桃肉のようにピンク色で、何度も使われた牝の証であるヒダを深く刻みながら、とめどなく蜜を分泌している。上の方では、包皮から頭をのぞかせたクリトリスがぷっくりと充血して震えていた。

「まあ……♥そんなにジロジロ見られると……あっ♥」

男が中指をゆっくりと膣内に差し入れた。第一関節、第二関節——ぬちゅぬちゅという音とともに、指はあっけなく根本まで呑み込まれる。

「んあああああっ♥♥」

神夜の腰が浮いた。膣壁が男の指をギュウギュウと締め付ける。その締め付けの強さは尋常ではなく、指一本ですらこの快感なら、本物のペニスを啜え込んだらどうになってしまうのか——そんな期待が、彼女の胎を熱く火照らせた。

「ゆ、指……♥お兄様の指がわたしのおまんこの中で動いてる……♥んっ、んっ、んっ……♥あ、そこ、そこですう……♥」

男が指を曲げ、膣の上壁を刺激すると、神夜は大きく目を見開いて仰け反った。Gスポットと呼ばれるその場所を執拗に擦られ、足先がピンと伸び、つま先が丸まる。溢れ出る蜜が指を伝い、手のひらを濡らし、畳に小さな水溜まりを作り始めていた。

「い、イきます……♥ 指だけでイカされちゃいます……♥ お兄様、すごい、すごすぎますう……♥」

「イけよ」

「は、はいっ♥♥ イきますっ、イギますっ、いつ、いつ、イ——っ♥♥♥」

ぶわり、と膣内の蜜が噴き出した。同時に神夜の全身が大きく痙攣し、背中が弓なりに反る。膣壁が指を離すまいとギチギチに収縮し、クリトリスがビクビクと脈打つ。彼女は「んおおおおっ♥♥」と長い悲鳴をあげて、そのままぐったりと畳に沈んだ。

「はあ……はあ……はあ……♥ い、今の……すごかった……♥ 指だけでこんなにイカされるなんて……感激極まりないです……♥」

四、おチンポ様との邂逅

息も絶え絶えの神夜だったが、濡れた瞳で見上げた先には、男の股間があった。ズボンの上からでもはっきりとわかる、巨大な隆起。彼女はその膨らみを目にした瞬間、ふらふらと身体を起こし、自然と正座になった。

「まあ……♥」

男がベルトを外す。ズボンを下ろす。下穿きごと引き下ろされたその瞬間、ぶるんっとな質量感をもって飛び出したのは——長大で、太く、血管の浮き出た、堂々たる男性器だった。

「お、おチンポ様……♥」

神夜は両手を胸の前で組み、まるで神前に祈るように、うっとりとその陰茎を見つめた。亀頭は大きく張り出し、先端からはすでに透明な我慢汁が滲んでいる。カリの部分はくっきりと張り出し、竿は太く、陰嚢は精液をたっぷり蓄えて重そうに垂れ下がっていた。

「まあ……なんて立派なおチンポ様……♥ こんなに立派なおチンポ様、初めてお目にかかりました……♥」

神夜は両膝で畳を進み、男の股間に顔を近づけた。爆乳が重力で垂れ下がり、乳首が畳に擦れて快感を生むが、それどころではない。彼女の目の前にあるのは、彼女が最も崇拜する存在——おチンポ様そのものだからだ。

「あの……お兄様……♥ おチンポ様に、奉仕させていただいてもよろしいでしょうか……？ 楠舞家の姫として、これほど立派なおチンポ様を前にして、何もしないなどありえません……♥」

男が小さく頷くのを見るや、神夜はそっと両手で陰茎を包み込んだ。熱い。硬い。そしてドクドクと脈打っている。親指の腹で亀頭を撫でると、ぬるりとした我慢汁が指に絡みついた。

「ん……♥ おチンポ様のお汁……ありがたく……♥」

ちろ、と舌を出して亀頭の先端を舐める。塩気と苦味と、男の濃厚な匂い。その味と香りだけで、神夜の秘所からは再び愛液がどろりと溢れ出た。

「れるお……♥ んっ、ちゅう……♥ ちゅぱ、ちゅぱ……♥ おチンポ様、おチンポ様あ……♥」

神夜は一心不乱に陰茎にしゃぶりついた。亀頭を唇で包み、舌で尿道をなぞり、カリの張り出しを念入りに舐め上げる。竿全体を唾液で濡らしながら、時折「んっ……♥」と吐息を漏らし、潤んだ瞳で男を見上げる。その表情はまさに、崇拜と欲望とが混ざり合った、淫蕩極まる姫君のそれだった。

「おチンポ様……もっと奥まで……喉の奥でお仕えさせてください……♥」

神夜は大きく口を開け、男のペニスを喉の奥まで呑み込んでいった。太い竿が彼女の口腔を満たし、亀頭が喉の入り口にゴリゴリと当たる。涙が目尻に滲み、唾液が顎を伝って爆乳の谷間にまで垂れ落ちたが、彼女はそれを厭うどころか、さらに頭を前後に動かして奉仕を続けた。

「んぐっ……♥ んぐぐっ……♥ お、おチンポ様……喉で締め付けて……んぶっ……♥ これで気持ちよくなっていますか……？ んっ、ちゅぽっ……♥」

神夜は喉の奥を意識的に締め付けながら、顔を前後に動かした。いわゆるイラマチオというやつだが、彼女にとっては強制でもなんでもない。自ら進んで、少しでもおチンポ様に快感を与えたいという献身の行為だった。

男の呼吸が荒くなる。腰が小刻みに震え始める。射精が近いのだ。

「ん……♥ おチンポ様ももっと大きくなって……♥ ああ、いきそうでいらっしやいますか……？ では……どうぞ、わたしの口の中に……おチンポ様の熱い御神酒、ありがたく頂戴いたします……♥」

「——っ」

「んぐうっっ♥♥♥」

ドクドクドクッ——！！

口腔内で陰茎が激しく脈打ち、大量の精液が喉の奥に直接叩きつけられた。濃厚で、熱く、粘り気のある白濁が、神夜の喉を満たし、食道を伝って胃へと流れ込む。彼女は一滴も零すまいと唇をきつく閉め、喉を上下させて精液を嚥下した。

「んぐっ……んぐっ……こく……こく……♥」

やがて射精が終わり、ゆっくりと口を離す。唇と亀頭のあいだに、名残惜しそうに唾液と精液の混ざった糸がブリッジをかけた。神夜はそれを指で拭い、ペろりと舐めとる。

「はぁ……♥ おチンポ様の御神酒……なんて濃厚で、なんて神々しいお味……♥ 感激極まりないです……♥ ありがとうございます、おチンポ様……♥」

神夜は深々と頭を下げた。まさに神事を終えた巫女のようなだった。しかし彼女の秘所は、先ほどよりもさらに激しく濡れそぼり、愛液が畳にじわりと染みを作っている。口でお仕えしているあいだも、ずっと子宮が疼いていたのだ。

「あの……お兄様……♥」

潤みきった瞳で、神夜は男を見上げた。頬は上気し、唇は唾液と精液でテラテラと光っている。128cmの爆乳は汗ばみ、乳首は痛いほどに尖っていた。そして彼女は、自分から両脚を開き、パイパンの秘所を指でクチュリと広げて見せる。

「おチンポ様……今度は……こっちで……♥ わたしのおまんこにも、おチンポ様をください……♥ 子宮で、おチンポ様の御神酒を受け止めたいです……♥ 孕ませてください……お願いします……♥」

五、まぐわいの極み

男は再び神夜を畳に押し倒した。今度は優しくではない。獲物を捕らえる捕食者の動きだった。神夜はそれに「あっ♥」と小さく声をあげながら、自ら脚を大きく広げ、膝を抱える。

「どうぞ……♥ おチンポ様……わたしのおまんこに……♥ あっ———♥♥」

グチュウウンツツ！！

一気に根元まで突き込まれた。あまりの質量に、神夜の目が大きく見開かれ、口が「お」の形に開く。膣壁が異物を感知して反射的に締まるが、それすらも男はものともせず、腰を深く押し込んだ。亀頭が子宮口にゴリッとキスをする。

「お、おごっ……♥♥ ふ、深い……おチンポ様、子宮に届いてます……♥ すごい……こんなの初めてです……♥」

男は返事をせず、腰を引き始めた。引き切る寸前で止め、再び一気に突き込む。グチュツ、グチュツ、グチュツ。律動は徐々に速度を増していった。

「んあっ♥ んあっ♥ んあっ♥ す、すごい……♥ おチンポ様がおまんこの中で……♥ んほおっ♥ あ、あ、あっ

♥♥」

ピストン運動のたびに、128cmの爆乳が激しく上下に波打つ。男はその揺れを楽しむかのように、時折腰を止めて乳房を揉みしだき、乳首を摘まみ、吸い上げた。そのたびに神夜は「ひゃんっ♥」と子猫のような声をあげ、膣壁をさらに強く締め付ける。

「おまんこ……♥ おチンポ様で扱げられて……♥ ああ、中が擦れて、擦れて……♥ 子宮の入り口、亀頭にノックされて……♥ あ、あ、ダメです、またイっちゃいます……♥」

「……イけ」

「はいっ♥♥ イきますっ♥ おチンポ様でイかされてっ♥ イグッ、イグイグイグイグううっ♥♥♥」

ぶしゃあああっ——

神夜の秘所から潮が噴き出した。同時に膣が激しく痙攣し、男の陰茎をギリギリと絞め上げる。しかし男は構わずに腰の動きを止めなかった。むしろ絶頂の最中こそが、より強い快感を与える好機だと言わんばかりに、さらに激しくピストンを繰り返す。

「イってるのにっ♥ イってるのにおチンポ様止まらなっ♥ ああっ、ダメっ、ダメダメダメえっ♥♥ またイグッ♥ イグイグイグウウウ——ツツツ♥♥♥」

立て続けの絶頂。神夜の意識が飛びかけるが、そのたびに膣奥を突き上げられ、現実には引き戻される。もはや彼女の口からは「おチンポ様」だか「イグ」だか「極まりない」だか、言葉と呼べるものは何も出てこない。ただ甘い悲鳴と、獣じみた喘ぎだけが部屋に響き渡る。

男が突然、神夜の身体をひっくり返した。四つん這いにさせられ、後ろから腰を掴まれる。いわゆるバックの体勢。神夜は枕に顔を埋めながら、尻を高く突き出した。豊満な臀部が男の股間に押し付けられ、無毛の割れ目がひくついて次の侵入を待っている。

「う、後ろから……♥ ああ……おチンポ様、どこからでも気持ちいい……♥ んあああっ♥♥」

再び一息に貫かれる。バックの体勢では、ペニスが子宮口により深く、より直接的に当たる。亀頭の先端が子宮の入口をコツコツとノックするたび、神夜は腰をくねらせて泣いた。

「奥っ、奥がいいっ♥♥ 子宮に当たってるっ♥ おチンポ様が子宮ノックしてるうっ♥♥ ああっ、ダメ、この体位ダメですっ、気持ちよすぎてっ、おかしくなっちゃいますっ♥♥」

「……子宮で受け止めたいんだろ」

「はいっ♥ 受け止めたいですっ♥ 子宮でおチンポ様の御神酒、たっぷりいただきたいですっ♥♥ だから、だからあ……お願いします、中に出してくださいっ♥♥ 孕ませてくださいっ♥♥ 苗床にしてくださいっ♥♥♥」

神夜はだらしく舌を出しながら、必死に懇願した。理性も矜持も何もかも、とっくに服の下に置き去りだった。今ここにいるのは、楠舞家の姫ではなく、ただの牝。おチンポ様に孕まされたくて仕方のない、一頭の淫らな雌だった。

「お願いします、お願いしますっ♥♥ 子宮にくださいっ♥ 濃い御神酒、子宮いっぱい注いでくださいっ♥♥ 孕むまで、孕むまで突いてくださいっ♥♥ おチンポ様ああっ♥♥♥」

男の腰の動きがさらに速く、さらに深くなる。パンパンパンという腰と腰がぶつかる音と、グチュグチュグチュという愛液の音が混ざり合い、宿の廊下にまで響き渡っていることだろう。しかし神夜はもう、それを気にする余裕すらなかった。

「イグッ♥ イグッ♥ イグイグイグイグイグイグウウウ—————ツツツ♥♥♥♥♥」

絶叫とともに、神夜はかつてない深さの絶頂に沈んだ。膣がこれまでにない強さで収縮し、子宮口がキュウツと窄まっては開き、男の亀頭に吸い付く。そして——。

ドクッドクッドクッドクッドクッドクッ—————！！！！！！

「んおおおおおおおっ♥♥♥♥♥」

子宮の奥深くに、熱い精液が叩きつけられた。量がすさまじい。一度や二度ではない。何度も何度も脈打ちながら、濃厚なザーメンが子宮を満たし、溢れた分が卵管へと遡っていく。神夜はその感覚をはっきりと感じ取っていた。自分の胎の奥で、新しい命が芽吹こうとしている。その予感だけで、彼女はさらにもう一度、小さく絶頂した。

「あああ……♥ 熱い……子宮が熱くて……おチンポ様の御神酒でいっぱいです……♥ これで孕みます……孕めます……♥ ああ……ありがとうございます、おチンポ様……♥ 感謝感激、極まりないです……♥」

男がゆっくりとペニスを抜くと、くちゅり……という音とともに、膣口からどろりと白濁が溢れ出した。それを見た神夜は、あわてて指で搦み、もう一度膣内に押し戻す。

「あ、こぼしちゃダメ……♥ 一滴でも多く、子宮に届けなきゃ……♥ せっかくおチンポ様が注いでくださった御神酒ですもの……♥」

そう言いながら、彼女はうつ伏せに寝転がり、膝を胸の下に折り込んで腰を高く上げる。いわゆる「妊娠しやすい体勢」だった。だらりと垂れた爆乳は畳に押し潰されて広がり、乳輪がさらに大きく引き伸ばされている。尻から太腿にかけては、精液と愛液と汗が混ざり合ってテラテラと輝いていた。

男はそんな神夜の姿をじっと見下ろしていた。その視線を感じ取って、彼女は振り返り、とろけるような微笑みを浮かべる。

「お兄様……♥今夜は本当に、ありがとうございました……♥わたし、あなた様のおチンポ様に出会えて……そして孕ませていただけて……姫として、女として、これ以上の幸せはありません……♥」

「……………」

「よろしければ……よろしければ、このまま朝まで……もう一度、いえ、何度でも……♥まだ身体が疼いていて……♥せっかくの夜ですもの、もっと、もっとおチンポ様を感じたいです……♥」

男が小さく息を吐くのが聞こえた。呆れなのか、感心なのか、それとも単なる疲れなのかはわからない。しかし彼がもう一度、神夜の身体に手を伸ばしたことは確かだった。

六、道連れのおさぼらけ

夜は更け、やがて白々と明けていった。

朝日が障子越しに差し込む部屋のなか、神夜は幸せそうな寝息を立てていた。裸身には男の上着がかけられている。彼女の胎の奥では、昨夜の精液が子宮にしっかりと根を下ろし、やがて小さな命へと育っていくはずだった。もっとも神夜の特異体質をもってすれば、出産までに数日もかからない。数日後には、この旅の途中で一度出産を挟むことになるだろう。

男はすでに身支度を整え、床の間に立てかけた斬冠刀を眺めていた。昨夜のことは夢ではなかった。証拠に、畳には愛液と精液の染みがいくつも残っている。

「……ん……♥」

神夜が目覚めた。まぶしように目をしばたたき、それから男の姿を認めて、ふわりと微笑む。

「おはようございます、お兄様……♥昨夜は本当に、お世話になりました……♥」

彼女はゆっくりと身体を起こした。男の上着がはらりと落ち、128cmの爆乳が朝日に照らされて黄金色に輝く。乳首はまだ昨夜の名残で少し赤く充血していた。

「あの……お兄様は、どちらへ？」

「……………」

「もし、もしよろしければ……旅は道連れ、と申しますし……♥よろしければ、これからもご一緒させていただきませんか……？路銀はまた、その……わたくし、身体を張って稼ぎますから……♥おチンポ様のことも、毎夜しっかりお世話いたしますし……♥」

男は少しのあいだ黙っていたが、やがて小さく頷いた。それを認めるや、神夜はぱあっと顔を輝かせ、正座して深く頭を下げた。

「ありがとうございますっ！ 感謝感激、極まりないですっ♥ 楠舞神夜、これよりあなた様の道連れとして、誠心誠意お仕えいたします。剣の腕も、身体も、心も……すべてを捧げますので……♥ どうぞ末永く、よろしく願いいたしますね、お兄様♥」

こうして楠舞神夜の一人旅は終わりを告げ、新たな道連れを得た二人の旅が始まったのだった。

行く先々の町で、神夜は身体を売って路銀を稼ぎ、しかし夜は必ず男の腕の中に戻り、「おチンポ様」に奉仕する。何度孕んでも美しさの衰えない彼女は、旅のあいだに何度も男の子種を宿し、産み、また孕むことになる。しかしそれこそが彼女の望みであり、悦びだった。

——楠舞神夜は今日も幸せである。衆目に爆乳と乳輪を晒し、時には魔物に苗床にされ、時には町で娼婦として男を貪り、そして最愛の道連れのおチンポ様に、今夜もまた、子宮を満たしてもらおうのだから。

(了)